

11月は、日中暖かい日が続き、子どもたちも戸外で、秋の自然にかかわる様子がたくさん見られています。11月15日に行われた「あきまつり」では、暖かい日差しの中、開催することができました。今年度は、中高校生、社会人のボランティアの活躍も見られました。また、昨年同様、たくさんの企業様にも協賛をいただくことができました。保護者の皆様と園、地域の方々がまつりを作り上げることができてよかったです。学級閉鎖のクラスを含むもり組は、26日におみこし担ぎを行いました。来年以降も、園に関わっている人たちのつながりを大事に、あきまつりを行っていきたいと思います。ご協力ありがとうございました。

GUESTに聞いてみよう♪- Vol.6

自立と生活のつながりとは — GUEST：増田 奈緒子

生活習慣の自立というと、食事や排泄、着脱に関することがイメージされるので、3歳未満のお子さんに対する関わりを考えることが多いですね。3歳未満のこの時期に大切にしたい大人の関わりは、子どもの「やってみたい」という気持ちも「一人でもできるけど、今日はやってほしい」という気持ちも尊重して関わることです。子どもが自分で行くことを見守り、必要に応じて手助けをしたり、子どもが自分でできた時に、「〇〇できたね」と言葉にして伝え、子どもの行動を認めていくことが重要です。こうすることで、子どもの「自分でやりたい」という意欲を伸ばし、その意欲が生活習慣の自立へと繋がっていきます。

では、ある程度身の回りのことができる3歳以上で生活習慣のさらなる自立を促すために、私たち大人はどのような関わりを意識していけば良いのでしょうか。

子どもたちは日々の生活の中で基本的な生活習慣や安全に必要な態度を身に付け、見通しを持ちながら身の回りのことを行うようになっていきます。最初は興味関心から色々なことをやりたがりますが、自分で行うことが当たり前になってくると、その行動自体の魅力が薄れ、やりたがらなくなってしまうこともあります。このような時に私たち大人の援助の一つとして、必要性和やり方の両方を子ども自身が理解できるように関わる、ということが挙げられます。

例えば、食事の前に手を洗うことについて考えてみましょう。色々なところを触った手にはばい菌がついているため、ばい菌がついたまま食事をする、食べ物と一緒にばい菌が体の中に入ってしまう可能性があります。ばい菌が体の中に入ると体の中で悪さをして元気が出なくなってしまうため、自分たちを守るために手を洗って清潔にする必要性が出てきます。手の洗い方(使用する石鹸の量や手洗いの手順、水の出し方等)を知っているということだけでなく、何のために行うのかという理由を子ども自身が理解すること、このことが自発的な生活習慣を身につけていく上でとても大切なことだと考えています。



「自分で行う」ということの他に「できなかった時に自ら助けを求められる」ということも大切にしたいことの一つです。自立を求めるあまり、「自分でやる」ことばかりに目が向きすぎると「自分でやらなければならない」「頼ってはいけない」という気持ちから自分が困っていても周りに発信できないというケースも見られます。困ったときに一人で抱えこまず周りに助けを求めるということも、幼児期に身に付けておきたいスキルの一つです。「難しかったら手伝うから言ってね。」「分からないところはある？」など、子どもからヘルプを出しやすい関わりを意識するのも、自分で行うということと同じくらい大切にしていきたいですね。